

## シニア世代の子育て支援と「世代性」の発達

佐藤 淑子（児童学科・教授）・廣田 昭久（子ども心理学科・教授）  
飯村 敦子（児童学科・教授）

### 問題と目的

少子高齢化社会において、祖父母である期間は25年以上で人生の約3分の1であり、祖父母世代と親世代のパートナーシップは家族全体にとっての恩恵であるとされる（Drewほか, 1998）。

佐藤（2019, 2020）はこれまで、祖父母による孫育てについて、日本をオランダ・イギリスと比較する文献研究を行った。三つの国の祖父母研究から①育児期世代は時間がなく、経済的負担も大きいと祖父母世代は認識していること、②三世代交流の中心は育児期世代であり、祖父母世代と育児期世代の関係性が良好であれば、祖父母と孫の触れ合う機会が多くなること、③祖父母の関わり方の心得として、育児期世代の教育を尊重すること、④母方の祖父母のほうが、父方の祖父母より多く、また祖父より祖母がより多く、孫育てに関わっていることの知見が共通して見いだされた。

佐々木・高濱（2018）は、子育ての支援者としての祖父母が近年台頭するようになった要因について、①人口動態の急速な変移：高齢者が心身ともに活発で健康を維持できており、日本の社会で晩婚化と未婚化が進み、孫の希少価値が高まった、②就労状況の変化：共働き夫婦の世帯が増え勤務中の保育・予定外の仕事・子どもの急な疾病などで祖父母のサポートが必要になる、③社会システムと家族の形態との不協和：女性の就業継続が増えているにもかかわらず、育児を社会的にサポートする体制が十分に整っていないこと、を挙げている。

佐藤（2015, 2019）は以前にワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ父母の育児の協同について、日本・オランダ・イギリスにおいてアンケート調査を行った。三国間で比較すると、父母のワーク・ライフ・バランスの到達度の高いオランダで、父親の育児参加が著しく、父母の育児感情もよい状況が明らかになった。日本は、オランダ・イギリスと比較して、父親の育児参加が充分ではなく、母親の育児の負担が大きく、育児感情は「子育てへの否定感」が父母ともに高いことを報告した。これと関連して、日本の祖父母による孫育ての特徴として、育児期の父親の長時間労働が改善されないと、家事・育児の分担が少なく、母親をサポートする祖父母の負担が大きくなりすぎるリスクがあるという示唆を述べた（佐藤, 2020）。

子育て世代のワーク・ライフ・バランスと“祖父母力”を検討した北村（2008）は、孫育ての理由として、「孫がかわいいから」という積極的な理由からだけではなく、働く母親の仕事と子育ての両立や、帰宅時間の遅い父親に母親が子育てを頼れない状況を支えるために祖父母の支援が行われていることを見出している。

高齢期の発達として、人は加齢とともに周りの人たちに助けをもらう機会が増えていく

が、自分も周りの人たちの支えになっているというソーシャルサポートを提供する体験は幸福感や自尊心に重要であることも指摘されている（佐藤ほか，2014）。

鎌倉女子大学学術研究所子ども・子育て研究施設が実施する「かまくらプロジェクト：親を支える祖父母講座」（2017年）では、外部講師として NPO 法人孫育て・ニッポン理事長の棒田明子氏にご登壇いただいた。棒田氏は「孫育て」（血縁のある孫に対する支援）と同時に「たまご（他孫）育て」（地域の血縁のない孫を対象とする支援）の重要性を提唱する（棒田，2017）。

また、森田（2017）は「他孫育て」の提案を踏まえ、シニアの社会参加としての子育て支援について、家族の関係性を超え、地域の子育て支援に関する意識についてアンケート調査を実施している。その結果、祖父母が血縁のある孫の世話に関して実際に支援している内容と、育児期の母親が地域のシニアによる育児支援に求める内容には重複が見られたことを報告している。

上述の北村（2008）も子育て期の家族が抱えるワーク・ライフ・バランスの困難の改善に向けて、家族間の世代間扶助に頼るのではなく、家族外領域—例えば企業や地域社会、社会保障政策—における世代間関係を総合的に再編する視点が不可欠であると論じている。

さて、2017年秋より実施を開始した「かまくらプロジェクト：親を支える祖父母講座」のグループワークを通し、参加者は「他孫育て」（地域の孫育て）に興味はあるが、子育て支援団体に関する情報がないこと、参加するきっかけがないことが見えてきた。片桐（2012）は高齢者のサクセスフルエイジングの実現手段としてボランティア活動に従事することを含めた社会参加活動を検討している。そして、日本におけるボランティア活動を妨げる要因としては、男性の場合、「仲間がいない」こと、「グループに関する情報が得にくい」ことに言及している（望月ほか，2002；片桐，2012に引用）。

丸島（2009）は、心理学者エリクソンの中年期の心理社会的な自我発達における「発達課題」について実証的に研究している。中年期の *virtue*（基本的徳目）である「世代性」について論じ、「次世代を確立させて導くことへの関心であり、生きとし生けるものに対する世話（care）に必要である」というエリクソンの概念を紹介している。

そして、小林ほか（2016）は60～69歳の男女を対象とした地域の子育て支援行動尺度を開発し、子育て支援行動は、上述のエリクソンの提唱する次世代育成への関心を示す「世代性」が高い人ほど、地域の子育て支援行動尺度の得点が高いことを見出した。中高年者が若い世代と知り合いになれる交流の場をつくることが子育て支援行動の発生率を高めることにつながると主張している。

上記の問題意識から、孫育て・たまご（他孫）育てに意欲を示すシニア世代の規定因を探る目的で、質問紙調査を実施した。本調査は神奈川県で大学発・政策提案制度に提案し、採択された「少子高齢社会のかながわ多世代子育て・孫育てコミュニティ構築事業」の一環として行ったものである。

## 方法

### 調査方法

調査会社（マクロミル）のアンケートモニターを利用して WEB によるアンケート調査

を実施した。

**調査時期** 2021年 8 月

**調査対象**

研究目的は高齢者の孫育て・他孫育てに意欲を示す規定因を探ることにあるため、「ボランティア団体」や「子育て支援に関する団体」の参加者・非参加者がほぼ半数になるようにスクリーニングを行った。55歳～74歳の男女をほぼ均等に割り付けた。

**サンプル数**

有効回答数は1,349人。その内訳は、

- ①「ボランティア団体」や「子育て支援に関する団体」に参加している・アフターコロナでは再び参加したい55歳から74歳の男女611名
- ②「ボランティア団体」や「子育て支援に関する団体」に参加したくない・関心がない・したいと思うがしていない・過去には参加した経験がある55歳から74歳の男女738名

**調査内容**

①世代性尺度（丸島・有光，2007）の20項目、②孫育て参加の理由（宮中ほか，1995）の1項目、③社会参加活動（片桐，2012）の13項目、⑤性別役割分業意識、⑥同居の家族構成、⑦孫に関する情報（森田，2017）、⑧血縁者以外に向けた地域の子育て支援への興味、⑨子育て支援に関わる研修やワークショップの希望（斎藤，2014）。

## 結果

### 1. 調査対象者の基本的属性

調査対象者の基本的属性を表1に示した。

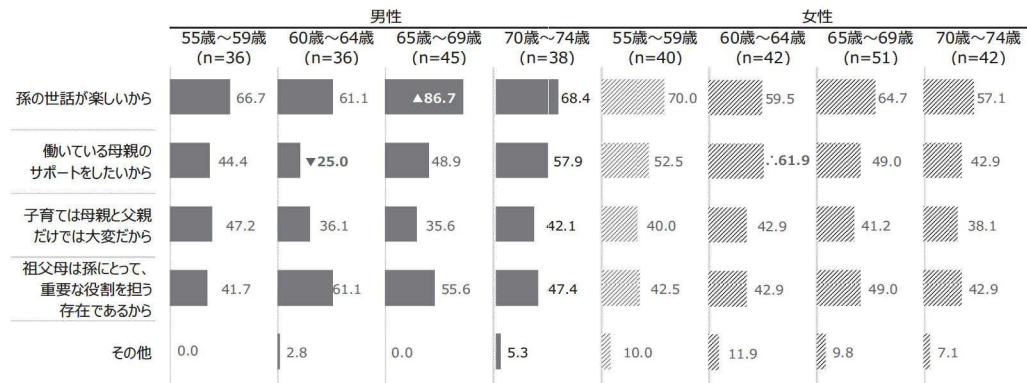
表1 調査対象者の基本的属性

		55歳～59歳 (n=305)	60歳～64歳 (n=330)	65歳～69歳 (n=360)	70歳～74歳 (n=354)	全体 (n=1349)
性別	男性	157 (51.5)	167 (50.6)	181 (50.3)	179 (50.6)	684 (50.7)
	女性	148 (48.5)	163 (49.4)	179 (49.7)	175 (49.4)	665 (49.3)
未婚	未婚	62 (20.3)	66 (20.0)	65 (18.1)	89 (25.1)	282 (20.9)
	既婚	243 (79.7)	264 (80.0)	295 (81.9)	265 (74.9)	1067 (79.1)
子ども	有	254 (83.3)	282 (85.5)	308 (85.6)	300 (84.7)	1144 (84.8)
	無	51 (16.7)	48 (14.5)	52 (14.4)	54 (15.3)	205 (15.2)
孫	有	184 (60.3)	205 (62.1)	236 (65.6)	236 (66.7)	861 (63.8)
	無	121 (39.7)	125 (37.9)	124 (34.4)	118 (33.3)	488 (36.2)
孫の数		2.1	2.4	1.8	1.4	1.9
就業 状況	フルタイム	153 (50.2)	110 (33.3)	56 (15.6)	15 (4.2)	334 (24.8)
	パートタイム	54 (17.7)	75 (22.7)	54 (15.0)	51 (14.4)	234 (17.3)
	自営業	22 (7.2)	36 (10.9)	46 (12.8)	27 (7.6)	131 (9.7)
	なし	76 (24.9)	109 (33.0)	204 (56.7)	261 (73.7)	650 (48.2)

注.括弧内は%

男女比率はほぼ同じで、既婚者が79.1%と多い。孫がいる人は全体で63.8%であった。就業状況について、全体のサンプルで見ると、フルタイムで働く人も24.8%おり、55～59歳の層では、50.2%と高い。





注. ▲1%水準で有意に高い ▼1%水準で有意に低い ∴10%水準の高い傾向

図1 孫育てへの参加理由

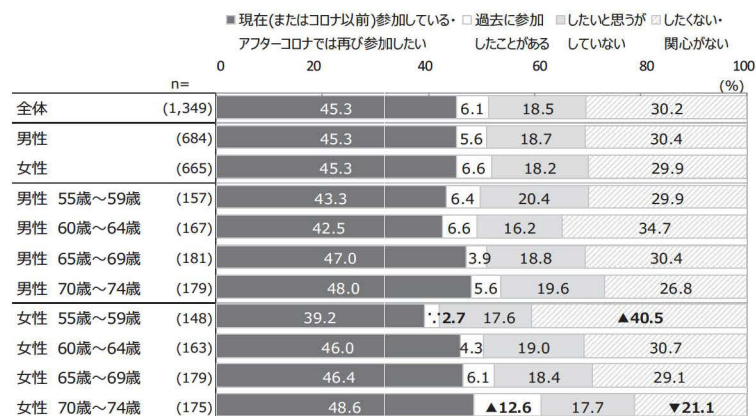
## 2. 孫育て

孫を育てることに参加する理由（複数回答）を男女別、年齢別に比較した（図1）。

血縁のある孫育ての理由は「孫の世話が楽しいから」の割合がすべての年齢層で、男女共に最も多い。年齢別、性別で比較したところ、男性65歳～69歳の年齢層では「孫の世話が楽しいから」と答えた人の割合が1%水準で有意に高い。男性60歳～64歳の年齢層では「働いている母親のサポートをしたいから」と答えた人の割合が1%水準で有意に低い。また、女性60歳～64歳の年齢層では「働いている母親のサポートをしたいから」と答えた人の割合が高い傾向にあった。

## 3. ボランティアや子育て支援に関する団体への参加状況

ボランティア団体や子育て支援に関する団体への参加状況を問うた。上述のように、データ収集の際に「ボランティア団体」や「子育て支援に関する団体」の参加者・非参加者がほぼ半数になるようにスクリーニングを行った。



注. ▲1%水準で有意に高い ▼1%水準で有意に低い ∴10%水準の低い傾向

図2 「ボランティア団体」「子育て支援に関する団体」への参加



男女別・年齢別に参加状況を比較すると（図2）、女性55歳～59歳の年齢層では「参加したくない・関心がない人」の割合が1%水準で有意に高くなっている。他方、女性70歳～74歳の年齢層では「参加したくない・関心がない人」の割合が他の年齢より1%水準で有意に低い。男性ではどの年齢層でも大きな差が見られなかった。

次に、「ボランティア団体」への参加状況をコロナの感染拡大以前の日常生活、またはアフターコロナの日常生活を想定して回答を求めた。

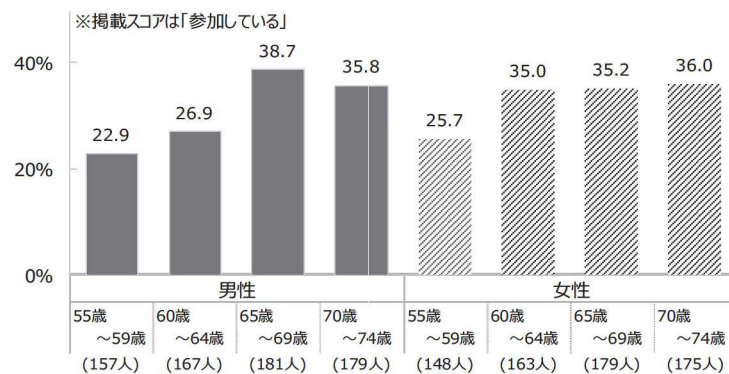


図3 ボランティア団体への参加状況 —男女別・年齢別の比較—

「ボランティア団体」への参加状況を年齢区分別に見たところ、男性では、65歳～69歳の年齢層が最も多く38.7%であり、次が70歳～74歳の年齢層の35.8%だった。60歳～64歳の年齢層では、26.9%である。女性は、60歳～64歳、65歳～69歳、70歳～74歳の3つの年齢層で35%以上となっていた。男女共に仕事の負担が少なくなった後に、ボランティア団体への参加が増えている可能性があるが、男性より女性の方が早く「ボランティア団体」への参加が増加するといえる。

次に、「子育て支援に関わる団体」への参加状況を男女別、年齢別に見た。

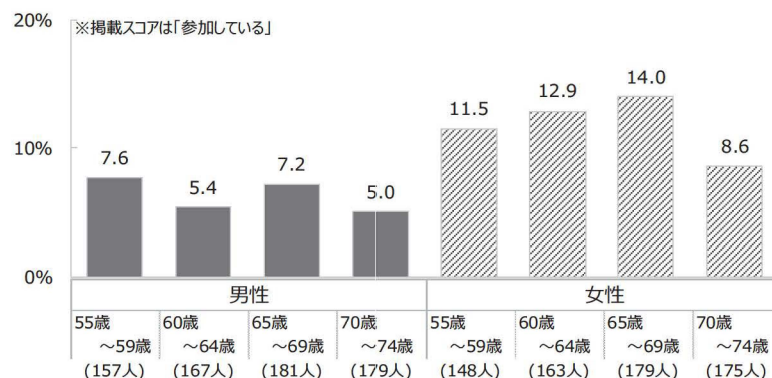


図4 「子育て支援に関わる団体」への参加状況 —男女別・年齢別の比較—

女性の方が男性よりも参加率が高く、男女どちらも70歳～74歳の年齢層では低下してい

た。

#### 4. ボランティアや子育て支援に関わる団体に参加しない理由

ここで、「ボランティア団体」や「子育て支援に関わる団体」に参加しない理由（複数回答）をみる。

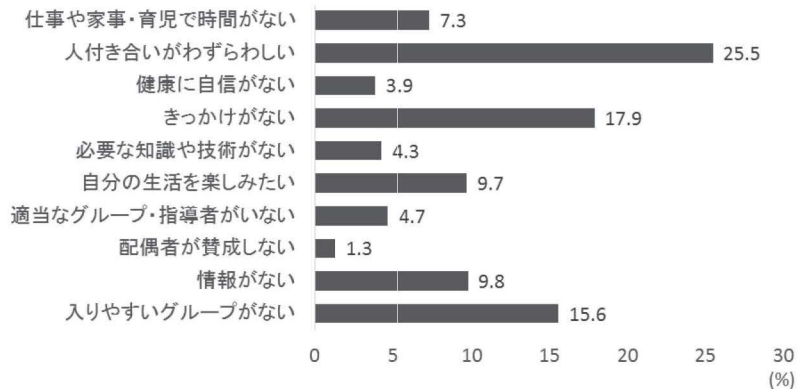


図5 「ボランティア団体」や「子育て支援に関わる団体」に参加しない理由

「ボランティア団体」や「子育て支援に関わる団体」に参加しない理由は、「人付き合いがわずらわしい」（25.5%）、「きっかけがない」（17.9%）、「入りやすいグループがない」（15.6%）の順となっている。

さらに、子育て支援に関わる団体に参加していない理由として、「入りやすいグループがない」と回答した人を男女別に比較すると、男性の方が女性よりも1%水準で有意に高い（図6）。これは上述の先行研究、片桐（2012：146）の調査結果とも一致する。会社人間だった人が定年退職後、ルールもメンバーもわからない未知の地域社会のグループに入ることへのためらいがあるという。

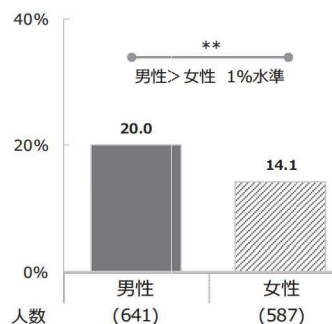


図6 子育て支援に関わる団体「入りやすいグループがない」回答した比率—男女別—

### 5. どのような研修やワークショップがあればよいか

子育て支援に関わるうえで、どのような研修やワークショップがあればいいと思うかを尋ねたところ、「世代間ギャップの解消」が31.6%と最も高くなっていた（図7）。

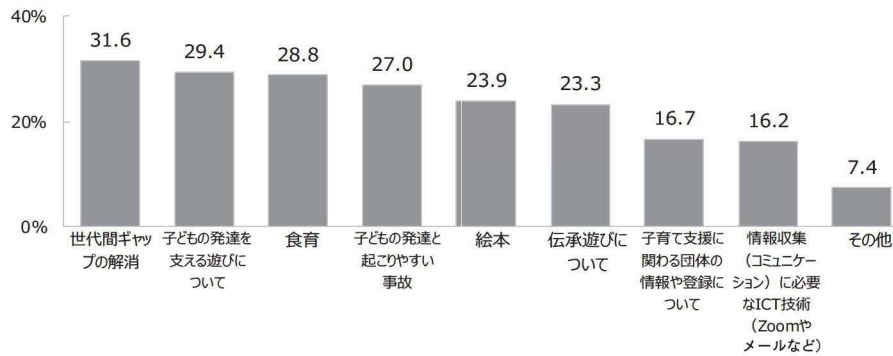
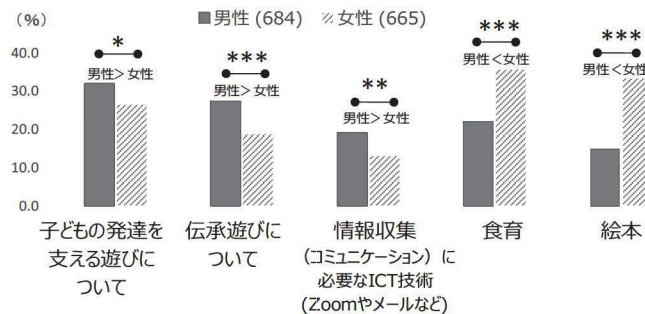


図7 子育て支援に関わる研修やワークショップの希望（3つまで回答）

また、ここでは性差がみられた（図8）。男性の希望が多かったのは、「子どもの発達を支える遊びについて」「伝承遊びについて」「情報収集（コミュニケーション）に必要なICT技術（Zoomやメールなど）について」のワークショップであり、女性の希望が多かった内容は、「食育」「絵本」であった。



注. \* 5%水準で有意 \*\* 1%水準で有意 \*\*\* 0.1%水準で有意

図8 どんな子育て（孫育て）支援のワークショップを希望するか—性別比較—

父親の育児参加に関する研究では、「父親がよくしている」と母親が評価しているのは、「子どもの遊び相手」が1位となっており、性差がみられている（住田・中田, 1999）。また、小野寺（2004）は祖母10人へのヒアリングの結果から、祖母から見るとほとんどの祖父は「経済的ケア」に積極的で、「身体的ケア」については「教えること（自転車乗り、読み書き）」と「遊ぶこと（遊び方を教える）」に集中しており、性別役割分業があることを報告している。イギリスの祖父母の研究では、祖母が養育や食事の世が多いのに対し、祖父は活動やゲーム遊び、サッカーに連れていくなどするという報告がある（Buchanan & Rotkirch, 2016）。この点については、安藤（2017）が祖父母のジェンダー間の相違は、



日々の子育てにかかわっている父親と母親に比べると緩やかであることも指摘している。

## 6. たまご（他孫育て）への興味

他孫育てへの興味はどうだろうか。地縁または自治体・NPO 法人を通しての親族以外の子育て支援についてどう思うかを5段階で尋ねた。

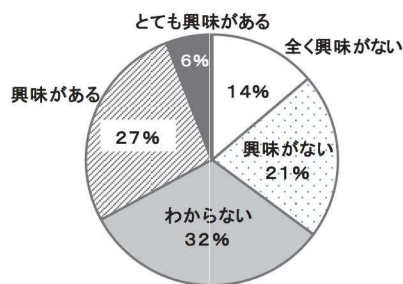


図9 地縁または自治体・NPO 法人を通しての親族以外の子育て支援についての興味

「とても興味がある」と「興味がある」を合わせると33%、「全く興味がない」と「興味がない」を合わせると35%、「わからない」が32%と、ほぼ同じくらいの比率で3つに分かれた。

上記の質問で「興味がある」「とても興味がある」と回答した人（444人）に、「ボランティアなどを通して、親族以外の子育て支援に携わったことはあるか」と尋ねたところ、47%の人が「携わったことがある」と回答した。

他孫育てへの興味について、性別比較した結果を図10に示した。

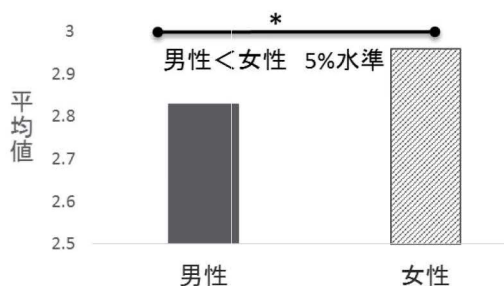


図10 他孫育てへの興味—性別比較—

女性の方が男性よりも他孫育てへの興味がある人が多かった。

さらに、他孫育てへの興味の度合いを、①「血縁のある孫有群で孫育てに参加している」群、②「血縁のある孫有群で孫育てに参加していない」群 ③「孫なし群」の3群で比較した（図11）。

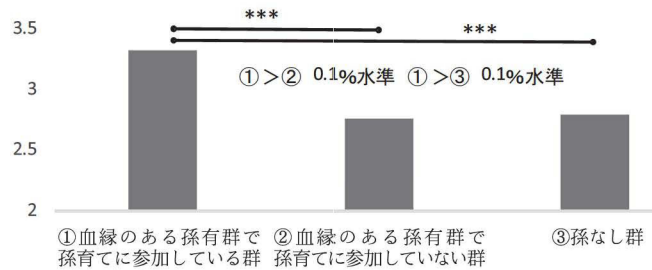


図11 他孫育てへの興味—孫育て参加群、非参加群、孫なし群の3群比較—

「血縁のある孫有群で孫育てに参加している群」の他孫育てへの興味は他の2群よりも高くなっていた。根ヶ山（2019）は子育てにおいて母親以外の人たちが豊かに子育てにかかわることを特徴とする「アロマザリング」を提唱している。血縁のある孫育てに関わることを通して、幼ない子どもの身の回りの世話を祖父母として再び経験することが血縁のない他孫育てへの興味を高めることが考えられる。

## 7. 孫との物理的距離

孫がいる人に孫とどのくらいの距離に暮らしているのかを尋ねた（表2）。

表2 孫との物理的距離

1 番近い孫との距離	同居	4.8%
30分		27.2%
30分から1時間		12.0%
1時間から2時間		10.6%
2時間以上		45.5%

2時間以上が45.5%と最も多い（表2）。

孫との物理的距離について、同居から1時間未満を①孫近居群、1時間以上を②孫遠方群、の2群に分けて「他孫育てへの興味の度合い」を見た（図12）。

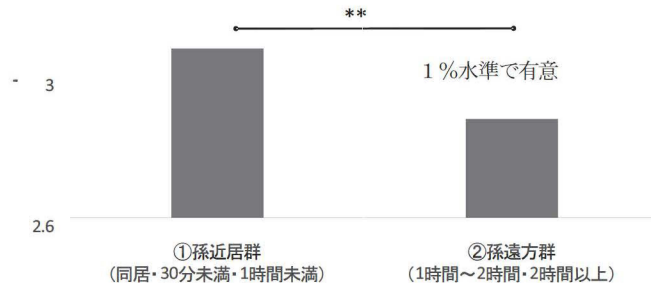


図12 他孫育てへの興味—孫との物理的距離による比較—

孫が近くに住んでいる人の方が、「他孫育てへの興味の度合い」は高い。これも図11の結果と同様に解釈することができる。

## 8. 高齢者の世代性

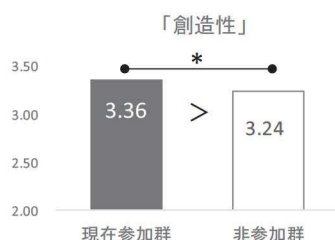
上述の丸島（2009）によれば、エリクソンが成人後期の発達課題として示した世代性とは、次世代を確立させて導くことへの関心であり、下記の3つに分かれている。

第1因子 創造性（自己の個性性における関心と行動）

第2因子 世話（いろいろな世代の人々への関心と直接的な援助）

第3因子 世代継承性（象徴的な永遠の命を後世につなげたい欲求）

世代性尺度の3つのカテゴリー「創造性」、「世話」、「世代継承性」について「ボランティア団体」・「子育て支援に関する団体」の参加群と非参加群の2群で比較した。「現在（またはコロナ以前）参加している・アフターコロナでは再び参加したい」を現在参加群、「過去には参加したことがある」、「したいと思うがしていない」、「したくない・関心がない」を非参加群とした。



「ボランティア団体」・「子育て支援に関する団体」現在参加群と非参加群の比較

図13 「創造性」

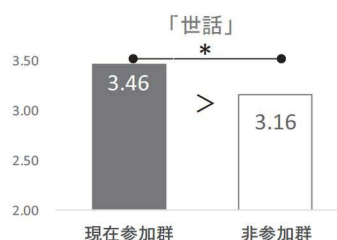


図14 「世話」



図15 「世代継承性」

「創造性」、「世話」、「世代継承性」について、いずれも現在参加群の方が非参加群よりも高くなっていた。これは上述の小林ほか（2016）の先行研究の結果と一致する。

## 総合考察

本研究では、シニア世代の血縁のある、またはない他孫育てに参加する規定因を検討した。

調査会社を通じたアンケート調査であったため、ボランティア活動または子育て支援に関する団体の活動に「参加している・アフターコロナでは参加したい群」と「そうでない群」をスクリーニングして、ほぼ半数になるようにデータ収集を行った。先行研究を参照し、55歳から74歳の男女を対象とし、年齢層と性別が均等になるように割り付けた。（図1）

図2において、「ボランティアや子育て支援に関する団体への参加状況」の年齢別、男女別データを見ると、女性では55歳から59歳の年齢層で、「したくない・関心がない」と回答した人の割合が高い。背景には、この年齢層では仕事や家庭内役割の比重が高い可能性がある。また、70歳から74歳の年齢層の女性で、「したくない・関心がない」と回答した人の割合が低いことも明らかになった。

また、図3の「ボランティア団体への参加状況」において、65歳から69歳の男性の参加



が最も高くなっている。図4を見ると、「子育て支援に関わる団体」への参加は、女性の方が高く、性差がみられた。性別役割分業意識の高いシニア世代では、女性の方が、子育てを中心的に担った経験が男性より多いことが背景にあると考えられる。

高齢者の社会活動への参加を検討した先行研究(片桐, 2012)を参照し、「ボランティア活動や子育て支援に関する団体」に参加しない理由を尋ねた。「人づきあいがわずらわしい」「きっかけがない」「入りやすいグループがない」が上位を占めている。「きっかけがない」が17.9%「入りやすいグループがない」が15.6%いることから、シニア世代を、ボランティア活動や子育て支援に関する団体につなげることができれば、シニア世代でボランティア活動や子育て支援に意欲はあるが参加できないでいる人の活動を向上させることが示唆された。

さらに、図6からは、男性のほうが、女性より、「入りやすいグループがない」と回答する傾向が高いことから、「入りやすいグループ」が見つければ、「子育て支援に関わる団体」に参加する男性が増える可能性がある。様々な自治体や、NPO法人の提供する研修やワークショップは、シニア世代の意欲を引き出すことができるのではないだろうか。

ではシニア世代はどのような研修やワークショップを希望しているだろうか。全体では「世代間ギャップの解消」を希望する人が最も多くなっていた。イギリス、オランダ、日本それぞれの国における祖父母の孫育てに関する研究(佐藤, 2019; 2020)からは、祖父母と孫の交流を促進する要因として「子ども世代と祖父母世代の価値観が一致すること」が大切であることが共通して示されている。祖父母世代は、「世代間ギャップの解消」が大切であることを認識してはいるが、現実にはそのハードルは高いことが、明らかになった。

興味深いのは、男性は、「遊び」や「情報収集(コミュニケーション)に必要なICT技術(Zoomやメールなど)」の研修を希望する傾向が高く、女性は、「食育」「絵本」への関心が高かったことである。育児期の男性が子どもの身の回りの世話より、遊びを通して関わる人が多いことが報告されており、シニア世代でも同様の傾向が伺える。

さて、血縁のない地域の小さなお子さんに関わる「他孫育て」について、約3割の人が、興味があると回答し(図9)、興味がある人の約半分は実際に親族以外の子育て支援にかかわった経験がある。

この「他孫育て」への興味は、どちらかと言えば、女性が高い(図10)。そして、中でも「血縁のある孫がいて、実際孫育てに参加している群」、「孫との近居群」の興味の度合いが高い結果となった(図11、図12)。

最後に、高齢者の「世代性」について検討した。心理学の先行研究から、高齢期の人は次世代を育成し世話をする「世代性」が自我発達の一つの指標として示されている。ボランティアや子育て支援に関する団体への参加群と非参加群の比較から、「世代性」の三つの側面である「創造性」、「世話」、「世代継承性」のいずれにおいても、参加群の発達が著しいことが明らかになった(図13、図14、図15)。

内閣府「高齢者の生活と意義に関する国際比較調査」令和2年度によれば、日本では高齢者単身世帯、高齢夫婦のみの世帯が増加しているが、「別居している子供との接触頻度」が「ほとんど毎日」と回答した割合は日本、アメリカ、ドイツ、スウェーデンの4カ国の中で日本が10.9%と最も低い。また、「家族以外の人で相談し合ったり世話をし合ったり

する親しい友人」がいないと回答した割合は、4カ国中日本が31.3%と最も高い。

大日向（2013）は、企業人・社会人・職業人として培われた経験や資格・特技や趣味などの豊かな経験を地域の子どもに活かしてほしいと「実の孫の祖父母から地域の祖父母へ」というメッセージを述べている。

以上のことから、シニア世代の子育て支援を促すには、ボランティアや子育て支援に関する団体に参加するきっかけ、孫・たまご（他孫）育てに参加する上でニーズの高い研修・ワークショップにつなげる情報提供が重要であると考えられる。

松岡（2021）によれば、オランダはボランティア活動が盛んな国であるが、組織化されななかで人々や地域のためになされる活動を行うことが大切であると認識し、福祉組織がそれぞれに得意分野を持ってボランティアを集め、教育・研修して有用な地域資源として育て上げているという。今後日本でも地域の子育て支援を支えるボランティアと専門職との連携・協働をさらに進めていくことが望まれる。

## 引用文献

- 安藤 究（2017）. 祖父母であること. 名古屋大学出版会
- 棒田明子（2017）. 「孫育て」「たまご育て」で広げるまち保育の可能性. 三輪律江・尾木まり（編著） まち保育のススめーおさんぽ・多世代交流・地域交流・防災・まちづくりー 萌文社
- Buchanan Ann & Rotkirch Anna（2016）. *Grandfathers : Global Perspectives*. Macmillan Publishers Ltd.
- Drew, L.M., Richard, M.H. & Smith, P.K.（1998）. Grandparenting and its Relationship to Parenting. *Clinical Child Psychology and Psychiatry*, Vol.3（3）, 465-480.
- 片桐恵子（2012）. 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会
- 北村安樹子（2008）. 子育て世代のワーク・ライフ・バランスと“祖父母力”ー祖父母による子育て支援の実態と祖父母の意識ー. *Life Design REPORT*, 5-6月号, 第一生命経済研究所, 16-27.
- 小林江里香・深谷太郎・原田謙・村山陽・高橋知也・藤原佳典（2016）. 中高年者を対象とした地域の子育て支援行動尺度の開発. *日本公衛誌*, 63, 第3号, 101-112.
- 丸島令子・有光興記（2007）. 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討. *心理学研究*, 78（3）, 303-309.
- 丸島令子（2009）. 成人の心理学ー世代性と人格的成熟. ナカニシヤ出版
- 松岡洋子（2021）. オランダ・ミラクルー人と地域の「力」を信じる高齢者福祉ー. 新評論
- 宮地由紀・泊 祐子（2005）. 学童期の孫が祖父母に抱く親密性の関連要因. *家族看護研究*, 10（3）, 87-94.
- 宮中文子・松岡知子・西田茂樹・岩脇陽子・中谷公子・中島健二（1995）. 中高年女性（祖母）の子育て参加の実態と心理的健康との関連について（第1報）. *老年社会科学*, 17（1）, 21-29.
- 望月七重・李政元・包敏（2002）. 高齢者のボランティア活動（参加・継続意向）に影響を与える要因ー高齢者大学の社会還元活動実態調査からー 関西学院大学社会学部紀要,

91, 181-193.

森田麻記子 (2017). シニアの社会参加としての子育て支援—地域のシニアを子育て戦略として迎えるための一考察. 富士通総研 (FRI) 経済研究所研究レポート No.441

根ヶ山光一 (2019). 共有する子育て. 金子書房

内閣府「高齢者の生活と意義に関する国際比較調査」令和2年度

大日向雅美 (2013). 「人生案内」孫は来てよし、帰ってよし. 東京堂出版

小野寺 理佳 (2004). 孫育てがもたらす祖母の性別役割分業観の揺らぎ. 21世紀ヒューマンケア研究機構研究年報, 10, 95-106.

斎藤嘉孝 (2014). 祖父母むけ公的プログラムにおける効果評価とリクルーティング“孫育て講座”に関する事例検討. 法政大学キャリアデザイン学部紀要, 第11巻, 215-227.

佐々木尚之・高濱裕子 (編著) (2018). 三世代の親子関係—マッチングデータによる実証研究. 風間書房

佐藤眞一・高山緑・増本康平 (2014). 老いのころ—加齢と成熟の発達心理学. 有斐閣アルマ

佐藤淑子 (2015). ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ父母の育児行動と育児感情—日本とオランダの比較— 教育心理学研究, 63, 345-358.

佐藤淑子 (2019). 父母のワーク・ライフ・バランスと育児の協同：日本・オランダ・イギリスの比較. 異文化間教育学会第40回大会発表抄録, 182-183.

佐藤淑子 (2019). 父母のワーク・ライフ・バランスと祖父母による孫育て—日本とオランダの比較—. 鎌倉女子大学学術研究所報, 第19巻, 77-88.

佐藤淑子 (2020). 父母のワーク・ライフ・バランスと祖父母による孫育てへの参加—イギリスの現状と研究から考える—. 鎌倉女子大学学術研究所報, 第20巻, 75-85.

住田正樹・中田周作 (1999). 父親の育児態度と母親の育児不安. 九州大学大学院教育学研究紀要, 第2号, 19-38.

## 参考文献

小松紗代子・斎藤 民・甲斐一郎 (2010). 孫の育児に参加する祖父母の精神的健康に関する文献的考察. 日本公衛誌, 第11号, 1005-1014.

古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男 (1989). 生活満足度尺度の構造—主観的幸福感の多次元性とその測定. 老年社会科学, 11, 99-115.

中原 純 (2011). 前期高齢者の祖父母役割と主観的 well-being の関係. 心理学研究, 82, (2), 158-166.

杉山佳菜子・小川真由子・榊原尉津子 (2020). 地域による子育て支援としての孫育ての可能性—親子関係と主観的幸福感からの祖父母の意識の検討—. 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編, 第3号, 179-192.

氏家達夫・高濱裕子 (編著) (2011). 親子関係の生涯発達心理学. 風間書房

山下亜紀子 (2004). 育児支援者の動機付けに見る地域型育児支援の展望. 国立女性教育会館研究紀要, 第8号, 39-50.